

# 大乘莊嚴經論の原典考

— 求法品を中心として —

## 舟 橋 尚 哉

### はじめに

大乘莊嚴經論 (Mahāyāna-sūtrālaṅkāra) は初期唯識思想を伝えている重要な論書であり、一九〇七年に S. Lévi によってテキストが、また一九一一年にその佛訳が出版されて以来、我が国でも多くの研究論文・和訳、並びに Index が出版されている。しかし Lévi 本には間違いが多く、S. Lévi 自身も佛訳の脚註で、かなりの訂正を指摘している。更に長尾博士は Lévi 自身の訂正の他にチベット訳や漢訳並びに安慧釈 (Tib.) や大谷探検本 A、B などによって訂正を加え Index (Part One) の初めにそれを列挙している。

この長尾博士の訂正により、莊嚴經論はかなり正確に読めるようになったわけであるが、それでも漏れている

ところがないわけではない。そのいくつかは最近出版された Bagchi の Mahāyāna-sūtrālaṅkāra (1970) で訂正されているが、私は最近、武内紹晃教授並びに龍谷大学図書館の御好意により、大谷探検本 A、B を参照しながら、莊嚴經論を読む機会を得たので、Bagchi の訂正が正しいかどうか。また S. Lévi 自身の訂正に問題はないか。そしてそれ以外にも訂正すべき箇所がないかどうか。などの点について私見を述べようと思う。

また山口博士が「中辺分別論積疏」(二〇六頁註⑤)において、「茲に引用せらるる『五明処云々』の文に対して未だその出拠を審らかにせないが」といわれる「五明処に勤行せずしては云々」(同書一〇三頁)の偈と同一の偈を「大乘莊嚴經論」の偈文中に見出したので、この点についても考察してみようと思う。

判らぬ」といっておられる。

⑧ 最初に S. Lévi 自身の訂正で、長尾博士も Bagchi がそのままそれを採用している個所で、私が疑問に思うのは求法品第十一偈の長行で、(四)正勤(四正断)に関する記述に見出されるものである。すなわち、Lévi 本 (p. 57, l. 15) に於て

Pratilambhākārahāvanā nisevanākārahāvanā  
vinīrdhāvanākārahāvanāḥ pratipakṣākarārahāvanā  
naḥ samyakprahāṇesu |

「(1)得の行相の修習と(2)習の行相の修習と(3)除遣の行相の修習と(4)対治の行相の修習とが〔四〕正勤に於けるものである」

とあるが、長尾博士の Index の初めの訂正によれば、  
“p.57, l.16 vinīrdhāvanā° read nirvighāṇā° (L)”  
とあるから、S. Lévi 自身の訂正を採用しつつここに載せたものと思われる。しかしはたしてこれを訂正する必要があるのであろうか。

宇井博士は「大乘莊嚴經論研究」(六一四頁)で「nirvighāṇāna° vighāṇāna° は聞く散るといふ意味、nir-がつけば、その否定になるのであろうが、……すなわち

私は大谷探検本 A、B がともなう vinīrdhāvāna (A 本 53 a, l. 1°、B 本 55 b, l. 2) と読めるようにあるし、また Lévi の佛訳に於ける訂正が nirīdhāvāna (vinīrdhāvāna の誤り) を nirvighāṇāna と訂正していること疑問を感じて、vinīrdhāvāna の用例を調べてみた。幸い俱舍論の中に、この莊嚴經論の所説と非常によく似た記述を見出すことができた。すなわち「俱舍論」智品には  
caturvidhā hi bhāvanā | pratilambhābhāvanā ni-  
sevanābhāvanā pratipakṣābhāvanā vinīrdhāvāna-  
bhāvanā ca | (P. Pradhan p. 410, l. 17)

とあるが、これを先程の莊嚴經論の所説と比較すると、vinīrdhāvānābhāvanā と pratipakṣābhāvanā との順序が異なること、莊嚴經論には各々 rakāra とくろ語が入っていること、そして莊嚴經論の nisevana は俱舍論では nisevana となっていることが知られる。もっとも、俱舍論の vinīrdhāvānābhāvanā は梵文四一〇頁の脚註⑩によれば、Ms. に vinīrdhāvābhāvanā とあり、たゞであるが、続く俱舍論の偈文だ、[pratipakṣa-] vinīrdhāvābhāvanā (27 c) とあり、その長行に [pratipakṣa-] vinīrdhāvānābhāvanā (p. 411, l. 2) とあるから

やはり *vinirdhavanabhavana* と解すべきであろう。このことは Yasomitra の註釈によっても確かめられる。

ちなみに俱舍論の漢訳を見ると、

「修有<sup>二</sup>四種。一得修。二習修。三对治修。四除遣

修」(大正二九・一四〇上)

とあるから、*vinirdhavanabhavana* は「除遣修」と訳されてゐることになる。*vinirdhavana* のチベット訳は *thag bsrin pa* (15巻265—3—7) または *thag bsrin ba* (265—4—1) で、莊嚴經論のチベット訳 *bsal ba* (除去) とは一致してゐないが、Yasomitra の註釈によれば、*vinirdhavanam kleśa-prāpti-cchedah* (p. 640, l. 11), *thag bsrin ba ni non mous pahi thob pa bood paho* (117巻45—4—8) とあるから、意味内容は同じであると思う。なお莊嚴經論の漢訳は「断」である。

つては *vinirdhavana* という語は本来どういふ意味をもつ語であらうか。語根は *vi-nir-√dhav* であらうが、この *nirdhavana* には、① *running out, escape* の意で、

② *washing away, cleaning* という意がある。今は第二の *washing away, cleaning* の意で、Edgerton の

*Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary* p. 301 によれば *sarvakeśamala-nirdhavana-taya* という用例があげ

られている。今は *vi-nir-dhavana* であるが、*vi-* は「離れる」の意をもつ強めであるから、従つて「煩惱の垢を」除く、洗い落す」の意で、莊嚴經論で「断」、俱舍論で「除遣」と訳された語と大体一致するよう思う。この「四種の修」はすでに大毘婆沙論に見出され、婆沙論卷第五百には、

「修有<sup>二</sup>四種。一得修。二習修。三对治修。四除遣

修」(大正二七・五四五上)

と説かれ、婆沙論卷第六十三には、

「修有<sup>二</sup>四種。謂得修。習修。对治修。除遣修」(大

正二七・八二四中)

と説かれている。

かくして私は *vinirdhavana* を Lévi の訂正の如く *nirvigrahana* と訂正する必要はないと思う。このことは俱舍論の梵本 (Pradhan 本) によつても確かめられたように思う。

## 二

次にこれは Bagchi のテキストには訂正されているが、<sup>⑬</sup>長尾博士の Index では訂正がなく、また荻原博士の梵<sup>⑭</sup>和大辞典にもそのまま莊嚴經論の用例としてあげられて

いるので、影響力の大きい *asamikalpa* → *asatkalpa* を検討してみようと思う。

求法品第三十九偈中にある *asamikalpa* はチベット訳 *yan dag min rtog* で、漢訳では「非真分別」と訳されている。長行中では *abhutaparikalpa* (Lévi p. 64, l. 25)、「チベット訳 *yan dag pa ma yin pañi kun tu rtog pa* (76—2—5) とあるから、「虚妄分別」の意であることが知られるが、では *asamikalpa* のまきでよいであろうか。確かに「華嚴經」入法界品の中には、これに類する語が見られるが、その場合、*sarvaktśasamikalpa* が「一切虚妄分別」(実叉難陀訳)と訳されており、また *asambhū-tasamikalpa* (Vaidya 本、*asambhūtasamikalpa*) も「虚妄分別」と訳されている。しかし *asamikalpa* を「虚妄分別」または「非真分別」と訳してよいであろうか。

大谷探検本 A、B を見ると、いずれも明瞭に *asatkalpa* (A 本 60 a, l. 1、B 本 63 b, l. 3) となっている。従って、こゝは Bagchi の如く *asamikalpa* を *asatkalpa* と訂正することが正しいように思う。更にこのことを傍証する資料として、「莊嚴經論」求法品第十七偈に *asatkalpa* という語があり、チベット訳は *yan dag ma yin rtog pa* となっており(漢訳の相当語なし)、その長行では *abhūta-*

*parikalpa* (Lévi 本 p. 59, l. 17)、「チベット訳 *yan dag pa ma yin pañi kun tu rtog pa* となっているから、第三十九偈の *asamikalpa* を第十七偈の *asatkalpa* と比較すれば、チベット訳がほぼ同じであることからしても、第三十九偈の *asamikalpa* は *asatkalpa* と訂正した方が自然であるように思われる。

なお「三性論偈」の第四偈にも *asamikalpa* という語が見出されるが(山口益佛教学文集「上巻」二二五頁)、Ms. は *asamikalpa* であり(「宗教研究」新第八卷第二号八一頁並びにブサンの論文「後出」一五四頁の脚註④参照)、マ・ラ・ヴァレ・ブサンは *asatkalpa* に訂正しておられる。(de La Vallée Poussin: *Le petit traité de Vasubandhu-Nāgārjuna sur les trois natures* — *Mélanges chinois et bouddhiques*, Bruxelles, Juillet 1933, 一五四頁参照)

### 三

それでは Bagchi の訂正がいつも正しいかというに、必ずしもそうではない。例えば第三偈の長行で *vimokṣamukha* (解脱門) が *vimokṣasukha* と訂正されているが、これはチベット訳や漢訳などから見て訂正しない方がよい。

また第四偈の長行で <sup>②</sup>visesa (殊勝) が <sup>③</sup>vasesa となっているが、これは誤植かもしれないが visesa の方がよいと思う。

また <sup>④</sup>veditavya (知るべき) が <sup>⑤</sup>vaicitavya となっているが、これも <sup>⑥</sup>veditavya の <sup>⑦</sup>כיכיכיכיכיכיכיכיכיכי

Bagchi の訂正で疑問に思われるところはまた他にもある。例えば第四偈の長行で <sup>⑧</sup>yadārocite を長尾博士はチベット訳と Mahāvīnpati 9403 に <sup>⑨</sup>yaḍāroci, <sup>⑩</sup>yadāroci と訂正されているが、<sup>⑪</sup>yadā+arocite であるから、この訂正は正しい。しかるに Bagchi は <sup>⑫</sup>yadārocietan としているが、これでよいであろうか。大谷探検本 A・B は <sup>⑬</sup>yaḍāroci と読めるようであるし、<sup>⑭</sup>roci は <sup>⑮</sup>arocite puḍgalaparāḍhe (人の罪過が告白せられたとき) が abso. に理解せられるから、<sup>⑯</sup>arocite の方がよいように思う。そしてチベット訳もこのように読んでいる。

また長尾博士の Index では Lévi 自身の訂正を採用してすでに訂正されているが、Bagchi のテキストでは Lévi 本のままで訂正されていない場合もある。例えば求法品第二十九偈の <sup>⑰</sup>nirmānās を、長尾博士は Lévi の訂正によって <sup>⑱</sup>nirmānās と訂正しておられる。しかるに Bagchi のテキストでは <sup>⑲</sup>nirmārās のままで訂正され

ていない。しかし大谷探検本 A、B によれば、<sup>⑳</sup>nirmānās となっているし、チベット訳も Lévi 自身が指摘する如く、<sup>㉑</sup>na rgyal med (無慢) であるから、<sup>㉒</sup>roci はやはり S. Lévi や長尾博士の訂正の如く、<sup>㉓</sup>nirmānās ではなく <sup>㉔</sup>nirmānās とすべきであろう。

#### 四

次に山口博士がチベット訳によって訂正された箇所を検討してみよう。すなわち求法品第二十一偈(㉕)の Lévi 本に <sup>㉖</sup>tathā dvayaḥatātrāsti とあるが、山口博士はチベット訳によって <sup>㉗</sup>tathā dvayaḥaso'trāsti と訂正されている。しかし長尾博士の Index の初めにはこの訂正は見あたらず、<sup>㉘</sup>むしろ Index には <sup>㉙</sup>abhāsa ではなく <sup>㉚</sup>ābhata (XI. 21 光) のままで載せられている。

確かに <sup>㉛</sup>a-√bhā には to shine or blaze towards, to appear という意があり、<sup>㉜</sup>a-bhā (f. sg) には light, appearance という意があるから、一見「漢訳の「光」と一致するようにも見えるが、長行には <sup>㉝</sup>abhasata (漢訳「光」とあるのだから、<sup>㉞</sup>roci は <sup>㉟</sup>abhāsa ではなく <sup>㊱</sup>abhasata と解すべきであろう。Bagchi は後者の <sup>㊲</sup>abhasata と訂正している。しかしこれでは偈文の一行 16 シラブルが 1

シラブル増えると思われるので、山口博士の如く *abhaso'tra* と訂正する方がよいように思う。ちなみに大谷探検本の A 本を見ると、*dvayabhaso'tra* と読めるようであり、チベット訳もこの個所と長行の *abhasatā* をともに *snan ba* と訳している。

## 五

さて S. Lévi も、長尾博士も、Bagchi も訂正していない個所で、新たに訂正を加えたい個所について述べよう。すなわち、求法品第十一偈の長行には、Lévi 本に *'nimitasthityāśrayaparivṛṭṭy* (無相の住する転依) とあるが、大谷探検本 A、B によれば、ともに *'nimita-cittasthityāśrayaparivṛṭṭy* とあり、*sthiṭy* は *cittasthity* となつてゐる。<sup>④</sup> チベット訳でも *sens gnas* とあり、漢訳でも「心住」(大正三一・六一七)とあるから、ここはやはり *cittasthity* と解すべきであらう。

また求法品第八偈の長行で、Lévi 本に *astādaśavidho manaskarāh* (作意は十八種である) とあるが、大谷探検本 A、B にはそれぞれ *astādaśavidho yogamanaskarāh* となつていて *yoga* が入つてゐる。もっとも漢訳には、「十八種作意」(大正三一・六一〇下)とあつて、*yoga* に

相当する語が見あたらないが、チベット訳にも *mal-hbyor yid la byed pa* とあつて、*mal hbyor* (sk. *yoga*) が入つてゐるのであるから、やはり *yoga* を入れて、*yogamanaskarā* とする方がよいのではなかつたか。

次に求法品第十五偈の長行に、Lévi 本によれば *yathā māyā vantraparigrihitān* となつてゐり、Lévi の佛訳並ひに長尾博士の Index での *yantra* は *mantra* と訂正されてゐる。また Bagchi 本でも *yathā māyā mantraparigrihitān* となつてゐる。勿論 *yantra* を *mantra* に訂正することは正しいが、*māyā mantra* のまぎひといへばどうか。

大谷探検本の A 本、B 本はともに *māyāmantraparigrihitān* と読めるようであるが、チベット訳も *sgyu mahi snags* (sk. *māyāmantra*) と読んでゐるのであるから、この意味の取り方にも関連してゐるのであるが、私は *māyā-mantra* と読む方がよいと思ふ。

## 六

S. Lévi 自身の訂正を、長尾博士も、Bagchi も、そのまま採用してゐるところで、宇井博士のみがこの訂正に疑問を抱いておられる個所について述べよう。すなわ

ち求法品第四十二偈の長行に *prajña tatha sacca* とあるが、この *tatha* を Lévi 自身は *taya* と訂正しておられる。しかし宇井博士は「*taya* と訂正したのは、むしろ *yaya* か」とごつておられるように、私もここは *yaya* の方がよいように思う。なぜなら、この大谷探検本は A 本、B 本ともに明瞭に *prajña yaya sacca* となっているし、チベット訳でも *gan gis* とあるのであるから、ここはやはり *yaya* と訂正すべきであろう。

次に求法品第九偈の *'pajalpa* についで S. Lévi は *'pajalpa or 'jalpa* と訂正しておられ、長尾博士もそれをそのまま採用しておられる。いずれにしても意味はあまり変らないが、ここが偈文であることを考えれば、*'jalpa* の方がよいように思われる。なぜなら *'pajalpa* では一行 17 シラブルになるが、*'jalpa* なら 16 シラブルで次の行の 16 シラブルと同じになると思う。

Bagchi のテキストでも *'jalpa* となっているし、大谷探検本 A、B もともに *'jalpa* となっている。またチベット訳でも *brjod med 'jed* であるから、やはり *'jalpa* (= *ajalpa*) の方がよいと思う。

その他、わかりきった誤植のためか、長尾博士の Index の初めでは訂正されていないが、求法品第十四偈の長行の *abhinnatvā* は、勿論、*abhinnatvāt* の誤植である。大谷探検本 A、B にも *abhinnatvāt* とあるし、チベット訳も *tha mi dad pahi phyir ro* となっているから、*abhinnatvāt* に訂正すべきである。

また求法品第三十二偈に入る直前の長行に *'sanklāsa* とあるが、これも勿論 *sankleśa* の誤植であり、第四十一偈の長行の *parisāddhatvāt* を *parisuddhatvāt* の誤植である。

また求法品第十一偈の長行 *saṃudācārakāra* は、長尾博士の Index の初めには訂正されていないが、宇井博士と Bagchi とともに訂正されている如く、*saṃudācārakāra* (= *saṃudācāra-ākāra*) の誤植である。勿論、チベット訳には *nam pa (ākāra)* という語が見出される。同様に第四十三偈の直前の長行の *parāvattih* を *parāvattih* の誤植である。

他にもこういう箇所があるのであるが、今は主に求法品第一偈より第四十三偈の直前までを考察しただけ

あり、それ以後については別の機会に検討してみようと思う。

② 大谷探検本 A、B を用いた論文としては、先に述べた武内紹晃教授の論文が注目されるべきであり、この論文には「本」と A 本・B 本との対照表がついているので、大変便利である。

③ また求法品第三十五偈については、海野孝憲氏の論文があり、長尾博士の Index の初めに列挙されている訂正とは少し異なるので、この論文も注意すべきであろう。

## 八

④ さて最後に、山口博士が「中辺分別論積疏」の中で、「五明処に勤行せずしては、聖上者すら一切智性たらず。されば外人を破り、「それを」撰受する為に、又自ら知らんが為に、彼は彼「五明処」に勤行す」とある偈について、「未だその出拠を審らかにせないが云々」といっておられるが、この偈について考察してみよう。五明処というのは、いうまでもなく内明等の五明であり、大乘の菩薩は所知障を断ずるために、それらを学ばなければならぬ。そういう意味でこの偈文は重要であり、よく引用される。

⑤ しかしこの偈の出典については、山口博士もいわれる如く明らかでなかったようである。私は最近、「莊嚴經論」求法品を読んでいて、この偈と全く同一の偈を見出すことができた。(求法品はよく読まれているので、あるいはすでにこのことを指摘した人があるかもしれないと思い、二三の人に聞いたり、また調べたりしたが見あたらず、Pandeya も最近の出版物の中で、このことを知らないためか、この偈に対して全く別な還元梵語を与えている)

この「中辺分別論積疏」で引用されている「五明処云々」の偈と同一の偈というのは、「莊嚴經論」求法品の「明処(vidyasthana)を求めるに關する偈」として説かれている第六十偈である。すなわち、求法品第六十偈には、  
vidyāsthāne pañcavidhe yogamaktvā sarvajñat-  
vān naiti katham cīparamāryah |  
ityanyeṣān nigrāhaṇānugrāhaṇāya svajñartham  
vā tatra karotyeva sa yogam || 60 ||

⑥ 「五明処に勤行せずしては、最勝なる聖者は、如何にしても一切智性に至らない。それ故に、他人を征服し、撰受するために、また自ら知らんがために、彼はそこ「五明処」に勤行する」(第六十偈)

と説かれているが、これを先の「中辺分別論積疏」の偈

文と比較するとき、同一の偈であることはすぐに気がつくであらう。

「中辺分別論」安慧釈は、この個所の sk を欠いて

⑨ 「中辺分別論」安慧釈 Tib.

rig-pahi gnas lha-dag-la brtson par ma-byas-par |  
hphags-mchog-gis kyañ thams-cad mkhyen-ñid mi-ñgyur-  
te |

de-bas-[na-] gšan-dag tshar-gcod rjes-su bzuñ [-bahi]  
phyir-ram |

rañ-gis ges-par bya-[-bahi-] phyir-de-la de rtson-byed ||

\* 北京版は cos であるが、チルチ版によって gis と訂正。

「大乘経莊嚴の類」は cis (9-2-2) とあるから、この方がよいのかもしれない。

アンダーラインの 線は異なる箇所 線は一方のみ入っている語 ……線は表示の違いで全く同じ

いるので、ちなみにこの偈のチベット訳を対照すると次の如くなる。

⑩ 「大乘莊嚴經論」求法品 Tib.

rig-pahi gnas lha dag la brtson par ma byas par ||  
hphags mchog gis\* kyañ thams cad mkhyen ñid mi ñgyur  
te |  
(cis)

de lha bas na gshan dag tshar bcad rjes gzuñ dan ||  
bdag ñid kun śes bya phyir de la de brtson byed ||

以上の如く、「中辺分別論」安慧釈に引用される偈と

「莊嚴經論」求法品第六十偈とは全く同じ偈であることが知られる。

ところが Pandeya はこのことを知らなためか、「中辺分別論」安慧釈に引用されるこの偈に対して、次の如き全く異なる還元梵語を与えている。

⑪ āryo 'py agrah\* pañca vidyāpadāni  
nārabhya syāt kadāpi sarvajñah |

tato 'nyesām nigrahā 'nugrahārtham

svajñānārtham vā 'rabhettatra yatnam ||

\*Pandeya はこの agyrah の a を b と改めた。また padāni になった。

このように Pandeya は「五明処」の sk. を pañca vidyā-padāni と想定しているが、莊嚴經論の sk. によれば vidyāsthāne pañcavidhe とあり、「処」の sk.

は pada ではなく、sthāna となっている。ちなみに山口博士の「中辺分別論」安慧釈の Appendix に収録されている還元梵語を見ると、「五明処」の sk. は pañcasu vidyāsthāneṣu となっており、「処」の sk. は sthāna となっているから、この推定は正しい。しかし山口博士も、<sup>補註</sup>勿論この出典については気づいておられないから、「莊嚴經論」求法品第六十偈の *sa* と比較すると大分異なっている。山口博士の還元梵語は次の如くである。

anārabdheṣu pañcasu vidyāsthāneṣu  
āryo 'py agrah sarvajñatvam na bhavati |  
tato'nyesān nigrāhānugrahārtham  
svayam vā jñānārtham sa tatrārabhate ||

### まとめ

かくして私は「大乘莊嚴經論」求法品の原典を、大谷探検本 A、B を参照することにより考察してきたわけであるが、この「莊嚴經論」が思想的に難解であるためか、あるいは Ms. が不完全であったためか、S. Lévi のテキストには間違いが多く、Lévi 自身の訂正や長尾博士の訂正により、一応読めるようになったとはいえ、その後、宇井博士や Bagchi の訂正もあり、それでも漏れている

ところがあるように思われる。そのいくつかを私は指摘してきたわけであるが、Lévi 自身の訂正にも間違いと思われるところがあり、しかも長尾博士も、Bagchi もそれをそのまま採用しているところがある。例えば本論で論じた如く、vinirhāvana → nirvighātana は「俱舍論」の梵本などから見て訂正しない *vinirhāvana* のままの方がよいことがわかった。

また *asankalpa* は「三性論偈」にも見出され、これに類する語は「華嚴經」入法界品などにも見出されるが、大谷探検本 A、B や Bagchi 本や、また華嚴經の梵本の Vaidya 本や、更には「三性論偈」の *asankalpa* (Ms. *asankalpa*) に対するド・ラ・ヴァレ・ブサンの訂正などによって莊嚴經論の *asankalpa* は *asatkalpa* に訂正すべきであることが知られる。

また山口博士が「中辺分別論積疏」で「未だその出拠を審らかにせないが云々」の偈文については、本論で指摘した如く、「莊嚴經論」求法品の第六十偈と完全に一致しており、安慧は「莊嚴經論」にも註釈しているのであるから、安慧が「中辺分別論積疏」に引用している偈の出拠は「莊嚴經論」求法品第六十偈に他ならないということになる。

以上の如く、莊嚴經論のテキストには問題が多く、大谷探検本A、Bや、更に別の<sup>附記</sup>Ms.などが参照すべきけれども、もっと正確にテキストの校訂がべきだと思う。

(昭和五十三年三月七日脱稿)

- 註 ① S. Lévi: Mahāvāna-sūtrāṅkāra Tome I Paris, 1907.  
 ② S. Lévi: Mahāvāna-sūtrāṅkāra Tome II Paris, 1911.  
 ③ 野沢静証博士「梵文大乘莊嚴經論にあらはれたる三性説管見——求法品 (Dharmaparyeṣṭy-adhikārah) 第十一を中心として——」(大谷学報第十九卷第三号) 昭13年。  
 武内紹見教授「大谷探検隊招来の『大乘莊嚴經論』について」(竜谷大学論集第三五二号) 昭31年。  
 海野孝憲氏「弥勒の唯識思想について(1)——安慧造「経莊嚴積疏」求法品第13偈〜第29偈を通して」(名古屋大学文学部研究論集 XLV)。  
 早島理氏「菩薩道の哲学——大乘莊嚴經論を中心として——」(南都佛教第三十号)。  
 この他にも多くの研究論文がある。  
 ④ 宇井博士「大乘莊嚴經論研究」(昭36年) 三九頁—五八二頁参照。  
 ⑤ G. M. Nagao: Index to the Mahāvāna-sūtrāṅkāra Part One (1958), Part Two (1961) 参照。  
 ⑥ 大谷探検本A、Bの表示は武内紹見教授の論文による。(前掲論文参照)。  
 ⑦ Dr. S. Bagchi: Mahāvāna-sūtrāṅkāra of Asaṅga

(Buddhist Sanskrit Texts-No. 13), 1970. 参照。

- ⑧ S. Lévi の佛訳一〇五頁脚中⑦参照。  
 ⑨ Nagao: Index to the Mahāvāna-sūtrāṅkāra p. xiv, 7, 22 参照。  
 ⑩ Bagchi: Mahāvāna-sūtrāṅkāra p. 58, 7, 14 参照。  
 ⑪ 宇井博士「大乘莊嚴經論研究」二〇〇頁六行目に「古行相の修習」云々の語、「阿(nisevana = niṣvāna) 行相の修習」の誤なりであると思ふ。漢訳を「阿」云々の語。N本を vinidhāvāna (p. 69, 7, 18) 云々の語。(附記参照)。  
 ⑫ S. Lévi: Mahāvāna-sūtrāṅkāra Tome II Paris, 1911. p. 105 脚註⑥参照。  
 ⑬ U. Wogihara: Abhidharmakośavyākhyā by Yaśomitra Part II p. 640, 7, 11, 7, 15, 7, 18 参照。  
 ⑭ キヤムト訳云々 thag bsrin ba(117卷45—4—8) thag bsrin ba (45—5—2) 云々云々云々。  
 ⑮ Bagchi: Mahāvānasūtrāṅkāra (1970) p. 64, 7, 28  
 ⑯ Nagao: Index to the Mahāvāna-sūtrāṅkāra (1958) 云々 a-saṅkalpa-nimitta 「非真分別」(p. 42, 7, 4) 云々云々。N本を Lévi 本と同云々云々。  
 ⑰ 荻原博士編「梵和大辞典」p. 165 云々 a-saṅkalpa 「非真分別 Sūtr.」云々云々。  
 ⑱ The Gandavyūha Sutra, critically edited by D. T. Suzuki and H. Idzumi (1936) p.501, 7, 7, p. 455, 7, 26—p. 456, 7, 1 参照。  
 横山絃一「五思想よりみた弥勒の著作」(宗教研究二〇八号) 三〇頁参照。

①⑨ The Gandavyuha Sutra, critically edited by D.T.

Suzuki, and H. Idzumi (1936) p. 501, l. 7 参照。

大正一〇・四三二中参照。

Dr. Vaidya : Gaṇḍavyūhasūtra (1960) p. 401, l. 10

(Buddhist Sanskrit Texts No. 5) 参照。

②⑩ The Gandavyuha Sutra (1936) p. 455, l. 26~p. 456,

l. 1 参照。

大正一〇・四一九下と大正九・七六七中参照。

Dr. Vaidya : Gaṇḍavyūhasūtra (1960) p. 401, l. 10

utāsankalpa (p. 360, l. 15) と訂正をなす。

⑪ Vaidya 本は新編へ見かいた Baroda Ms. を参照して

その *śābha* asambhūtāsankalpa を *asambhūtāsankalpa*

の誤りかきかへた。

⑫ Lévi 本 p. 54, l. 20 漢訳「解脱門」(大正三一・六

一〇七) の *śābha* 訳 *mam par thar pañi sgo* (21—5

—oo~21—1—1) 参照。

⑬ Bagchi 本 p. 56, l. 5 参照。

⑭ Lévi 本 p. 55, l. 6<sup>r</sup> 漢訳「勝観察」(六一〇七) の

*śābha* 訳 *khyaḍ par* (21—1—1) 参照。

⑮ Bagchi 本 p. 56, l. 16 参照。

⑯ Lévi 本 p. 55, l. 8<sup>r</sup> *śābha* 訳 [rig par] *hya* (21—

1—oo) 参照。〔〕内はレヴィ版の補った。

⑰ Bagchi 本 p. 56, l. 17 参照。

⑱ Lévi 本 p. 55, l. 8 参照。Z本は *yada roncite* (p.

67, l. 9)?

⑳ Nagao : Index to the Mahāyāna-sūtrālaṅkāra p. xiv,

l. 6 参照。

⑳ Bagchi 本 p. 56, l. 18 参照。

⑲ A 本 50 b, l. 4<sup>r</sup> B 本 53 a, l. 6 参照。

㉑ 影印北京版 108 卷 21—1—8 参照。

㉒ Nagao : Index to the Mahāyāna-sūtrālaṅkāra p. xiv,

l. 39 参照。

㉓ Lévi の佛訳 p. 113 の脚註⑧参照。

㉔ Bagchi 本 p. 62, l. 13 参照。Z 本 (p. 75, l. 10) を

訂正した。

㉕ A 本 57 a, l. 6, B 本 59 b, l. 9 参照。

㉖ Lévi の佛訳 p. 113 の脚註⑧参照。

㉗ 影印北京版 108 卷 21—2—oo 参照。

㉘ 山口博士「世親造『説』三性論偈の梵藏本及びその註釈

的研究」(宗教研究新 8 卷第 3 号、昭 6) 九二頁参照。〔山

口益佛教学文集〕上巻一四八頁所収。

㉙ Lévi 本 p. 60, l. 8 参照。Z 本 *tathā dvayamātān-*

*nāsti* (p. 73, l. 8)?

㉚ Nagao : Index to the Mahāyāna-sūtrālaṅkāra p. 50

Bagchi 本 p. 61, l. 1 参照。

㉛ A 本 56 a, l. 1 参照。たがし B 本 (58 b, l. 1) は

*dvayabhātā* を *dvayabheta* の誤りかきかへた。

ひたさ。

㉜ Lévi 本 p. 57, l. 29 参照。Z 本は Lévi 本と同じ。

㉝ A 本 53 b, l. 3<sup>r</sup> B 本 56 a, l. 4 参照。

㉞ 影印北京版 108 卷 74—1—oo のベルグ版 167 b, l. 2 参照。

㉟ Lévi 本 p. 56, l. 22 参照。Z 本は Lévi 本と同じ。

- ④7 A本、51 b, l. 7<sup>r</sup> B本、54 b, l. 1 参照。
- ④8 影印北京版108巻73—3—7 参照。  
 デルタ版と同じ *naal hbyor yid la byed pa* (166a, l. 4) *naal byed pa*。
- ④9 Lévi 本、p. 59, l. 5 参照。Z本 (p. 72, l. 1) 同じ。
- ⑤0 Lévi の佛訳 p. 109 の脚註参照。
- ⑤1 Nagao: Index to the Mahāyānasūtrāṅkāra p. xiv, l. 62 参照。
- ⑤2 Bagchi 本、p. 60, l. 1 参照。
- ⑤3 A本、55 a, l. 1 参照。B本は *māyāmantu-parigṛhītaṅ* (57 b, l. 2) の *na* を *ni* と見えるが、*na* は *na* へ *māyāmantra-parigṛhītaṅ* である。
- ⑤4 影印北京版108巻74—4—2。デルタ版168 b, l. 1
- ⑤5 宇井博士の訳「譬えば幻が密呪に詛せられて木片・土塊等を見わす迷乱の因であるが如くに」(大乘莊嚴經論研究) 二〇五頁参照) は、私にはよくわからなく。「木片や土塊等を見わす」のではなく、「木片や土塊等が迷乱の因であって、象、馬、金等の形相を見わす」のであるから、私は「譬えば木片や土塊等なる迷乱の因(相)が、幻(師)の呪文によって呪詛せられた如く」の意であろうと思う。(幻(師)としたのは、漢訳と安慧釈とによる。また *parigṛhīta* は *pālī*, *parigṛhīta*: *haunted* の意を参照して訳した Dhammapada Commentary I p. 13, l. 15 及び *amanussaparigṛhīta* (haunted by ghosts) の例がある)。
- 野沢静証博士「梵文大乘莊嚴經論にあらわれたる三性説管見」(大谷学報第十九巻第三号)六一頁参照。なお、山口博士には、偈文との関連を重視したと思われる和訳があるが、文法的にはやや疑問が残る。(山口益佛教学文集) 上巻一五六頁参照。)
- ⑤6 Lévi の佛訳、p. 118 脚註参照。
- ⑤7 Nagao: Index to the Sūtrāṅkāra p. xv, l. 13 参照。
- ⑤8 Bagchi 本、p. 65, l. 23 参照。
- ⑤9 Lévi 本、p. 65, l. 20 参照。Z本は *tathāsacca* (p. 80, l. 9) である。⑤ 註参照。
- ⑥0 宇井博士「大乘莊嚴經論研究」六一五頁参照。
- ⑥1 A本、61 a, l. 1 参照。⑥ B本、64 b, l. 3 参照。
- ⑥2 影印北京版108巻76—4—1 参照。
- ⑥3 Lévi 本、p. 56, l. 14 参照。Z本は Lévi 本と同じ。
- ⑥4 Lévi の佛訳、p. 103 脚註参照。
- ⑥5 Nagao: Index to the Mahāyānasūtrāṅkāra p. xiv, l. 19 参照。
- ⑥6 Bagchi 本、p. 57, l. 15 参照。ただし、脚註に *apayaṅpa* がある。
- ⑥7 A本、51 b, l. 4<sup>r</sup> B本、54a, l. 6 参照。
- ⑥8 Lévi 本、p. 59, l. 2 参照。ただし Bagchi 本 (p. 59, l. 25) には訂正されている。
- ⑥9 A本、54 b, l. 7<sup>r</sup> B本、57a, l. 9 参照。
- ⑦0 影印北京版108巻74—3—8 参照。
- ⑦1 Lévi 本、p. 63, l. 1 参照。ただし Bagchi 本 (p. 63, l. 10) には訂正されている。
- ⑦2 Lévi 本、p. 65, l. 10 参照。ただし Bagchi 本 (p. 65, l. 15) には訂正されている。宇井博士の訂正もある。(宇

井博士「大乘莊嚴經論研究」六一五頁一四行目参照。）

②⑤ Lévi 本' p. 57, l. 27 参照。N 本⑤ Lévi 本と同じ。

②⑥ 宇井博士「大乘莊嚴經論研究」六一五頁二行目参照。

②⑦ Bagchi 本' p. 58, l. 24 参照。

②⑧ 影印北京版 108 卷 74—117 参照。

②⑨ Lévi 本' p. 65, l. 20 参照。

②⑩ 宇井博士「大乘莊嚴經論研究」六一五頁一六行目参照。

②⑪ Bagchi 本' p. 65, l. 25 参照。

②⑫ 武内紹晃教授「大谷探検『大乘莊嚴經論』について」(竜谷大学論集第三五二号)。註⑥参照。

②⑬ 同論文 七六頁—七七頁参照。

②⑭ T. Umino: Corrections of the Mahāyānasūtrāntakāra

XI, 35 (『印度学佛教学研究』第二十二卷第一号) 五—三

頁参照。

②⑮ Nagao: Index to the Mahāyāna-sūtrāntakāra p. xiv,

l. 43

②⑯ 山口博士「中辺分別論釈疏」一〇三頁参照。

②⑰ 同書 一〇六頁註⑤参照。

②⑱ Lévi 本' p. 136, l. 21 参照。

②⑲ 宇井博士「大乘莊嚴經論研究」四二九頁(寛分品第二十

五偈の長行) 参照。私が今から論じようとする求法品第六十偈の長行にも出ている。

③⑰ 山口博士「動佛と静佛」七八頁参照。

③⑱ 拙稿「佛教学セミナー」第一号五七頁参照。

③⑲ Pandeya: Madhyānta-vibhāga-śāstra (1971) p. 52, l.

24 参照。

③⑳ Lévi 本' p. 70, l. 12 参照。A 本' 65a, l. 4, B 本 69a,

l. 7 参照。

③㉑ 宇井博士「大乘莊嚴經論研究」二三五頁参照。

③㉒ S. Yamaguchi: Madhyāntavibhāgatīkā p. 66, l. 28~

p. 67, l. 3 参照。

③㉓ 影印北京版 108 卷 78—117。デルゲ版 176a, l. 3

③㉔ Pandeya: Madhyānta-vibhāga-śāstra (1971) p. 52, l.

24 参照。

③㉕ S. Yamaguchi: Madhyāntavibhāgatīkā p. 266, l. 7

【補註】校正の段階で「五明処に勤行せずしては云々」の偈

が、大乘莊嚴經論の偈であることを、山口博士が指摘し

ておられる(『山口益佛教学文集下』四七九頁並びに四八

二頁註⑩) ことを知ったので、この問題は私の無駄な詮

索だったようである。

【附記】校正中に最近 New York の The Institute for Advanced Studies of World Religions より発売の Microfilm

Mahāyānasūtrāntakāra (National Archives of Nepal) paper, 218 leaves, N 本とする) を見る機会を得たので、その頁

数を挿入した。しかし N 本は Lévi 本と殆んど同じであり、大谷探検本の A 本、B 本と比較して資料的価値は少ないように

思う。ただ Lévi 本では、かなり欠けている求法品第五偈が始めから完全な偈のまま、書写されていることは興味深い、

この第五偈については、近く武内紹晃教授が発表の予定があるとのこと、私はこの偈について全く言及しなかった。